

メッセージ「死から命へ」

水谷 憲 牧師

聖書 ヨハネによる福音書 5章24節－30節

ここ最近、さまざまな痛ましい死の知らせに、何ともやりきれない思いをしています。昨日も、大変人気のあった若手の俳優さんが自死されたというニュースがありましたし、その前にもネットの中傷に心痛められたためと思われる、若い女性の死が報じられていました。その他にも、ネグレクトによって亡くなった幼い子どもさんや、交通事故の巻き添えになって亡くなった方、逆恨みの的となって無残にも殺されてしまった方、コロナウィルスに感染して生涯を途中で閉じざるを得なかった方々など、周りの方々の痛みももちろんですが、当のご本人の無念の思いはいかばかりであったかと、察するに余りある思いであります。20年ほど前、神戸である大学院生が駐車場でのトラブルか何かで暴力団員だった男に殺されてしまった事件があったのですが、その被害者の知人の「この世に神なんていないことが分かりました」という談話は、今でも忘れられません。非常に悲しいですが、そう思われても仕方がないのかもしれない。そりゃあ近しい人からすると、「この世に神も仏もあるものか」という思いになるでしょう。

イエス・キリストも、最後は痛ましい死を遂げました。もうずいぶん昔の映画になってしまいましたが、「パッション」というイエスの受難を描いた映画がありました。その中では、本当にむごたらしいとしか言いようのない拷問、暴行がイエスに対して加えられるわけです。イエスが鞭打たれ、暴行される場面では、ローマの兵士は最初こん棒でイエスの背中を打ちのめすのですが、そのうち鋭いかぎつめ鉤爪のついた鞭をイエスの背中、さらにひっくり返してお腹へと打ち込むわけです。鉤爪がイエスの肉をざっくりとえぐり取る様子は、本当に見ていて怖いのです。もう閲覧注意のレベルです。イエスが鞭打たれたことは福音書にもさらりと書いてあるわけですがけれども、十字架の陰に隠れてよく分からなかったその鞭打ちのひどさというものがよく伝わってきました。そしてそれを笑いながら行う兵士たちの様子、さらにイエスを殺せ、バラバを釈放しろと叫ぶユダヤの群衆は、人の痛みやいのちに対する感覚が麻痺してしまっている、自分なりの正義を振りかざして、あるいは単なる自分のガス抜きのために誰かを袋叩きにしていじめ抜くような私たちの今の世界、今の社会とそっくり。2000年経って、人間社会は聖書の時代よりも文明的・物質的には大変豊かで便利に進歩したものの、人間の本質的なところについては、2000年経っても全く進歩していないことを思い知らされます。

そうしてイエスは、半死半生の身で、重い十字架を担がされながらゴルゴタの丘に連れて行かれ、手足に太い釘を打ち込まれ、十字架に磔^{はりつけ}にされ、「わが神、わが神、なぜ私をお見捨てになったのですか」と本当に悲しそうに叫ぶわけです。「ほらね、やっぱり神なんていないでしょ。いないんだから」と人は言うでしょう。わかる。そりゃそう言いたくなりますよ。しかし私は、それでも神はちゃんとおられて、私たちと共にいてくださっているのだと言いたいし、また言わなければならないと思っています。この世の本当に不公平な、悔しい現実を前にして「やっぱ神やら^お居らん！」と言いたくなる気持ちはあまりによく分かるのですが、でも神様はきっと心を痛めながらすべてを見守っていたということを信じたい。聖書を見ても、例えば創世記においてヤコブの息子ヨセフがエジプトに連れ去られた時も、士師記においてある名もない女がベニヤミン族の男たちに一晩中暴行され、挙げ句に自分の主人によってバラバラにされた時にも、またイエス・キリストが十字架上で惨めな死^{みじ}を迎えた時にも、いずれにも神様は出てこなかった。何で神様は出てきて助けてくれなかったのか、それは分かりません。でも例えばイエスの死の際、神殿の垂れ幕が真っ二つに裂けたところからは、神様の苦しい気持ちが見え隠れしているように思えます。神様は私たちを決して見捨てて放ったらかしているわけではなく、神様は心を痛めながらも私たちと共にいてくださって、私たちの様子を見て手を出したくなるのをぐっところえて、心を鬼にして私たちにとっての自由、良くも悪くもあらゆる自由を与えて私たちのことを見守っておられるのだと信じたいと思います。イエスだってもちろん、自分が身代わりとなって人間の罪を償うということが神様の御心であることは分かっていたはずなのですが、それでもあまりの辛さ、苦しさに、きっと叫ばずにはおれなかった。ですからこのイエスの「わが神、わが神、なぜ私をお見捨てになったのですか」という言葉は、神様に対する恨みの言葉でもなく、神様がいなことの証拠でもなく、神様の御心を理解していながらも「神様、苦しいよ…お父さん…」と思わず神様に助けを求める言葉だったんです。イエスにとって、神様が本当に身近な存在だから、神様を本当に信じているから出た言葉だったんです。

そういう運命をたどるイエスは、今日の聖書でこう言っています。「よくよく言っておく。私の言葉を聞いて、私をお遣わしになった方を信じる者は、永遠の命を得、また、裁きを受けることがなく、死から命へと移っている。」イエスの言う「私をお遣わしになった方」とは、つまり神様のことですが、私たちがその神様を信じるとは、私たちが神様に対して自分の抱える苦しみを素直にさらけ出すということでもあります。

作家の遠藤周作さんによると、先輩に当たる椎名麟三さんというキリスト教作家が「私がプロテスタントの洗礼を受けて一番よかったのは、これで死ぬ時に『苦しい』とか『死にたくない』とか、醜く叫びながら死んでいく覚悟ができたこと

だ」というふうに言っていたのだそうです。つまり「キリスト教徒になれば、死ぬ時『みなさん、ありがとう。私は安心して死んでいきます』と立派に言う人ももちろんいて、それはそれで立派なことだが、しかし同時に『俺は死にたくない、死にたくない』と言いながら死んでいくことも、また信仰だ。それを恥ずかしいと思わないで言えるようになった」ということのようにです。

これについて遠藤周作さんはこう言っています。「つまり、自分の全人間性をさらけ出すということ、そういう弱さや悲しみをさらけ出すことができるという気持ちを持てた、これはやはり信仰だと思うのです。普通、信仰者というと、その日から疑いがすべて晴れ、安心した気持ちでいる、とあなたは思うかもしれませんが。しかし、何度も言うように、そんなことはありません。みんなと同じ迷いをやり、みんなと同じ悩みをやっているわけです。ただ、どこが違うかという、迷いや悩みを持ったりしても、そういう迷いとか悲しみとかを知ってくれる人がいるのだということ、そういう存在があるのだということです。そして、これが、私がキリスト教を信じてよかったな、という気持ちになる大きな拠所でもあるのです。」と。そういう風に遠藤周作さんは言っておられるわけです。

キリストの教会に連なる私たちの多くは、イエスの言葉を聖書を通して学び、イエスの姿を通して神様を信じているはずですが。しかし実際には、どう信じているのか。私たちはイエスに批判された律法学者のように、見せかけの長い祈りだけで信仰を守っていると考えてしまっていないか。イエスに批判されたファリサイ派の人のように、「神様、私は他の人のように、奪い取る者、不正な者、姦通を犯す者でなく、また、この徴税人のような者でないことを感謝します。私は週に2度断食し、全収入の10分の1を献げています。」などと、傲慢な祈り、自分を誇る祈りをしてしまっていないか。

もちろん、不義を行わず、律法を守ることは大事です。それも神様の御心です。しかし先ほどのような傲慢な祈り、見せかけの長い祈りは、弱さをさらけ出す真実の祈りではない。イエスは「私は自分からは何もできない」と言っておられます。イエスでさえもそうですから、私たちはなおさら何もできない、小さな力しかない者なのです。そのことをどのくらい自覚できているか。私たちには、自分が何かをするのではなく、力ない自分だけでも神様の御心をなすために何らかの形で用いられることを願い祈る、という姿勢が大事なように思えます。神様はそんなファリサイ派の人よりも、遠くに立って、目を天に上げることもできず、胸を打ちながら「神様、罪人の私を哀れんで下さい」と言った徴税人の一言のざんげの方を義とされたわけです。「神様、ごめんなさい」「神様、ありがとうございます」「神様、苦しいです」「神様、神様…」一言でもいい、醜い叫びでもいい、義務感でもなく自分を誇るでもなく、ただ切なるざんげや感謝の思いを持って神様に語りかけ、救いを訴えかける者にこそ、神様は目を注いで下さり、永遠の命

へと導いて下さる。たとえ自分が死んだような状態にあらうとも、神様は必ずその切なる声を聞きつけ、命へと救い上げて下さるのです。

続いて聖書には「神の子の声を聞いた者が生きる時が来る」とありますが、イエスの声を聞くには私たちはよほど集中して心に向けていないと、聞くことができません。イエスも「聞く耳のあるものは聞きなさい」と何度も言っておられます。そしてその時が来ると、墓の中にいる者は皆、人の子の声を聞き、善を行なった者は復活して命を受けるために、悪を行った者は復活して裁きを受けるために出て来る、ともあります。ここでカトリックの本田哲郎神父は、「善を行った者」を「精一杯生きた人」、「悪を行った者」を「うわべをつくろってきた人」と訳しておられます。つまり、たとえ肉体は滅んでも、精一杯生きた人は、復活していのちを受けることができる。しかし、うわべをつくろってきた人は、復活して裁きを受けるのだということです。弱さや悲しみ、醜さをさらけ出してでも神様に心底すがって精一杯生きた人は、たとえ肉体は滅んでも、イエス・キリストがそうであったように、神様は永遠の命にあずかせて下さる。そこに言葉による信仰告白などは必要ない。精一杯生きた姿こそが、十分信仰を告白しています。与えられた命を精一杯生きた人は、たとえはっきりとした言葉による告白があろうとなかろうと、いわゆる自死であらうとなかろうと、神様は等しく天国に引き揚げ、永遠の命で満たして下さるはずです。残された私たちも、イエスの言葉に謙虚に耳を傾ける一方で、はた目には無様であっても、神様に正直な気持ちをぶつけ、神様にすがりつつ、与えられた命を精一杯生きていきたいものです。